View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

ロレンスにおける性と自然

――『チャタレイ夫人の恋人』をめぐって――

高山　翠

一

D・H・ロレンスが性を讃美し、性の解放を高唱した作家だという誤れる俗説は、彼の最後の長篇小説である「チャタレイ夫人の恋人」の裁判沙汰のおかげで、むしろこの書を読んだことのない人々の間に定着してしまったようだ。かと思えば一方では、『チャタレイ夫人』の性描写など今日では問題でなく、ロレンスなどもう時代遅れだという声もある始末である。

たしかに性風俗の面のみを現象的に見るならば、この半世紀の間に事態はロレンスなど遠く置きざりにして進んでしまったのであって、ロレンスが抵抗したところのヴィクトリア朝的偽善主義の生きていた今世紀初頭とは異り、露出趣味のもてはやされる今日においては、性風俗に関する様々なタブーからの解放という点に関してみればロレンス

の出る幕はもはやないようにもみえようし、『チャタレイ夫人』にしたところで、その生まじめな熱っぽさがむしろ大時代にみえるかもしれないのである。しかし性の風俗的解放はもともとロレンスとは何の関係もないものだったのだし、彼が現代にむかって投げかけた恐らく最も大きな警告、即ち自然の生命と切り離された人間の運命についての予言は、時代おくれどころかますます的確に的中しつつあるのではないか。

ロレンスが性をひたすら讃美したのかどうかも実は大変疑問なのであって、勿論ロレンスの作品にそういう解釈を許す面がない訳ではないのだが、彼が性を礼讃していると言えるのと殆ど同じ妥当さで、時として彼は性を憎んでいるということもできるのである。例えば中期の代表作『恋する女たち』において、一般に作者の代弁者だと考えられているバーキンが性に対して示した烈しい嫌悪はどうだろうか。彼によれば、性は「人間にとってひとつの枷」であり「男と女をそれぞれ不完全な半分にしてしまうもの」であったが故に、彼はそれを厭い避けてもいたのだった。アーシュラと愛し合うようになってからさえ、彼は彼女に対する激しい欲望と一方それに対する強情な反撥とにひきさかれるのである。ロレンスの小説中でも最も性を肯定的に扱っている『チャタレイ夫人の恋人』においても、チャタレイ夫人コニーはメラーズと結ばれて彼を愛するようになった後でも、性をばかばかしいもの、厭うべきものと感ずる感覚にしばしば苛まれるのである。

もっとも、性に対する態度のみならず、あらゆる種類のどぎつい二律背反がロレンスの作品には満ちみちているのであって、血と肉を信ずるというロレンスは同時に極度に精神性にとらわれていたともいえるのだし、彼の思想を生命主義の哲学と呼びうるならば、同時に死の礼讃者だということもできるのである。もっとも殆どの芸術家にとってこうした二律背反はつきものだともいえるのだが、ロレンスの場合この相反する感情のコントラストは殊の外強烈

であった。しかも彼はそれらを適当に按配してバランスをとろうとするのではなく、二律背反の世界を超える絶対なるものを探求しようとしていたのであり、そこにロレンス独自の宗教性がみられるともいえるのである。

そしてロレンスにとってこの「絶対的なるもの」を啓示するものは「自然」であった。それは「驚異に満ちた永遠に新しい世界」[1]であり、その永遠なるものにつながること、即ち性が単なる「人間ごと」を超えることによって、逆説的に人間と人間とを結びつけるものともなり得るという一つの理念の帰結を示したのがこの『チャタレイ夫人の恋人』であるといえよう。

この「自然」という言葉も実は注意を要する言葉なので、「自然に還れ」といったスローガンの中の「自然」はともすれば実体のない抽象に陥りやすいのであるが、ロレンスにとっては、頬をうつ雨、髪をかき乱す風、チクリと肌を刺すあざみ、背中に撓う松の若枝、雉子のひなの暖かさ、水を飲む蛇の舌のひらめき等、具体的に生きて動いているいのちの一つ一つが、そしてそれらすべてを貫いている或る神秘な力こそが自然であったのである。彼の自然描写の巧みさ美しさは多くの批評家の指摘するところであるが、それは単に技巧的な上手下手の問題ではなく、もっと本質的な意味をもっているのであり、時としてそれは人目をひきやすい性描写よりもっと重要な役割を果すこともあるのだ。

話を『チャタレイ夫人の恋人』にもどして云うならば、この小説が森を舞台としているということがやはり重要な意味を持っているのである。この小説の場合、この森の自然の持つ意義を指摘するのは誰もがやることであるが、それは主として炭坑町との対比において、即ち炭坑に象徴される資本主義的ないし産業主義的英国と、森に表象される牧歌的農業的英国との対立という意味であったように思われる。たしかにその対立もこの小説の一つの眼目であるこ

とは否定できないが、しかし、ロレンスにとって本来自然は機械文明と対比され比較されるような相対的な存在ではなく、もっと絶対的なものだったのであり、『チャタレイ夫人』の森も例外ではない。

もっとも、この小説はこれから取り上げようとする性と自然というライトモチーフだけでなく、観念主義や産業主義に対する非難、あるいは英国の階級社会と因襲に対する攻撃等、雑多な要素が詰めこまれていて焦点が曖昧になっていることは確かだし、F・R・リーヴィスも指摘しているように[2]、ロレンス自身は無頓着さと自然さを強調したと自負するこの小説が、皮肉にもどこかこしらえ上げられたわざとらしさを脱しきれず、その森も又生きて動いて生成発展する自然というより、小じんまりした牧歌的舞台の感を免れていないことは否定できない。しかしこうした欠点にもかかわらず、ここにはロレンスの自然観の一つの帰結が明確に示されているのである。

こまかなわき筋を省いてみれば、この小説の筋は、戦争によって下半身マヒとなったクリフォード・チャタレイ卿の妻コニーが心身共に枯渇しつつあった時、夫の猟園の番をするメラーズと結ばれて新生活にふみ出してゆくというだけのものにすぎず、グレアム・ハフの言葉を借りれば[3] almost vulgarly conventional であることも確かである。以下その月並みといっていいようなプロットの中に自然がどのようにかかわっているかを概観してみたい。

二

先に述べたようにこの作品の中で重要な役割を果す森であるが、これに関する言及が初めてみられるのは第3章の冒頭である。日ましに焦立ちやつれてきたコニーが、夫と邸を逃れて森に憩いを求めるようになったところであるが、そこには次の様な一節が見出される。

森は彼女のひとつの隠れ家であり、彼女の聖所（sanctuary）だったのである。

しかしそれは本当の隠れ家、本当の聖所ではなかった。何故ならば彼女は未だ森と関係（connexion）を持っていなかったからである。それは彼女が他人を逃れることのできる場所であるにすぎなかった。彼女は未だ森自身の霊（spirit）にふれてはいなかったのである。[4]（傍点筆者）

これは極めて示唆に富んだ言葉のように思われる。何故ならこれから後の彼女の変身は、彼女がこの森の霊にふれ、森と真の「関係」を持つに至る過程だとも考えられるからだ。

さて森番メラーズが初めて登場するのはもう少しあとの第五章であるが、ここではコニーは夫から新入りの森番として彼を紹介されるだけで、二人の間には何ら具体的な触れ合いは生れない。時は二月で春には未だ遠い季節なのである。次の章に入ると、彼女が夫の用で森番小屋を訪れ、メラーズが上半身を露わにして体を洗っているのを見てショックを受けるという場面があるのだが、この場面も単に性的な伏線としての意味のみを持つのではないことに注意すべきであろう。H・M・ダレスキーが、ここでのメラーズの肉体の描写と森の木々の描写との類似を指摘したのはまさに慧眼であった。[5] ロレンスは「土地の霊」（spirit of place）をしばしば問題にする作家であるが、クリフォードがいわばラグビイ邸やテヴァーシャルの霊を表象しているとするなら、メラーズはこの森のそれを反映していることが早くも明かにされているのである。

第八章に入ると季節はやっと早春になる。彼女の本格的な蘇生が始まるのはこの三月においてなのである。早咲きのアネモネの花が既に地をおおい、野生のラッパ水仙が金色の波をひろげる三月の森で、「コニーは奇妙に興奮し、彼女の頬には血の色がのぼり、瞳は青く燃えた」のであった。彼女が若い松の木にもたれて座り、花の匂いをかぎ、

太陽の暖かさを手にひざに受けていると、小舟のようにつながれていた心が解き放たれてゆくのを感ずるのである。

この早春の自然の描写はこよなく美しいが、同時に重要な意味を持っている。即ち、冬の草木のように半ば死んでいた彼女の心身がここで生き生きとよみがえり始めているからである。そしてそれはメラーズと未だ性的に結ばれていない時点で既に始まっていることに注意しなければならない。後にでてくるクリフォードの「私は彼女が森へ出かけること自体がだいたい気に入らない。」という言葉も当然これと関連づけられよう。もっとも、クリフォード自身もこの森を愛しているし、森が荒らされないように護りたいと思ってはいるのである。しかし彼は、先に引用した言葉をもう一度用いて云うならば、森と「関係」を持っていないが故に、又持つことが出来ないが故に、結局反自然の立場に立つことになる。そしてクリフォードとメラーズの対立が最高潮に達する第十四章において、クリフォードの車椅子が咲き乱れる勿忘草や釣鐘草の花むらを押し潰してゆく描写が執拗に繰り返されることになるのである。

炭坑経営に熱中してゆく夫に対して嫌悪を深めるコニーは、春の華やぎを増してゆく森を一層足しげく訪れるうちに、メラーズが雉子のひなをかえすために雌鶏に雉子の卵を抱かせているのを見、この作業にすっかり心を奪われてしまう。そして榛が芽ぶき、美しく日の輝く午後、遂に雉子のひなは生れ、彼女は一種の ecstasy のうちにこの新しいいのちを見つめるのである。そして、ある夕べ、又もひな鳥を見たくなったコニーが森の小屋へやって来た時、メラーズは彼女の掌にひなをのせてやった。その小さな暖い生きものを掌の上に感じた時、突然彼女の目から涙が溢れ、それと共に今まで女に対して閉されていたメラーズの心も解けてゆき、この小屋において二人は初めて自然に結ばれるのである。

このコニーがひな鳥を抱く場面は、しばしば指摘されるようにこの小説の中でも最も美しく印象的な場面であろう。

しかしこの時の彼女の感動を、単に、子供を生むことの許されぬ女が母性本能を刺激されたためであるとし、又そのよろわぬ女の姿に刺激されてメラーズがコニーを抱いたとのみ解釈しては、この場面のもつ重要さや美しさはまるで薄れてしまう。「ひなの、あるかなきかの重さの足を通じて、そのバランスを保とうとする生命のアトムが、ふるえつつコニーの掌に流れこんだ。」という一節の示す通り、大自然の生命が、生れたてのひなを通じて彼女の中に電流のように流れこんだのであり、その流れが同時に孤独なコニーとメラーズを結びつけたのだととるべきではなかろうか。彼女がひな鳥を抱いた体験と、メラーズとの性的な体験との間に次元の違いはない、というよりロレンスにとっては、あってはならないのであって、少くともこの場面においては、ロレンスはこの二つの行為の有機的な結合に成功しているが故に、この場面は最も美しいものとなり得たといえよう。

こうして次の日も又彼女は芽ぶく森へと出かけて行くのだが、この時のコニーをロレンスは「今日、彼女は自らの体内に、どっしりした木々の樹液が、上へ上へと高まり、芽の先へと押し上って小さな炎の様な若葉となる、その巨大な高まりを殆ど感ずることができた。」と描写している。これは彼女がこの森の霊に、芽ぶく木々のいのちに同化し始めたことを意味している。即ち彼女はメラーズという一人の男性と結ばれただけではなく、森と真の「関係」を持ちはじめたということなのである。

ただ、ここで注意すべきは、コニーがメラーズとの性的関係を通じて森のいのちに触れたという面のみを強調するのは片手落ちになるということである。春の自然の甦える力、雨や風や、花や芽ぶきや鳥たちから流れ出るちからが、コニーを森へいざない、二人を結びつけたともいえることは先に指摘した通りだからである。この性と自然の、いわば可逆的な相互関係については本論の終りに再びふれることにしよう。

さて、このようにして始まったコニーとメラーズの関係であるが、その後は必ずしも順調に発展して行くわけではない。メラーズには過去の恋愛や結婚の挫折の残した苦渋が淀んでいるし、コニーはコニーで階級的なこだわりや、知的な女としてのプライドや、更には古い羞恥心から自由になれないでいるからである。その二人が初めて真に満足すべき性を経験するのは夕暮の森のモミの茂みの中であったということも注目に価するが、それについても更に後に述べることにする。もっとも、この充実した性体験を経た後でも、二人をめぐる内的外的な障害に伴って二人の性も様々な起伏をくり返しては行くのだが、そうした起伏にもかかわらず森は四月から五月へ豪華な花の饗宴をくりひろげ、梨と李は白に、きんぽうげは黄に、釣鐘草は青の洪水となって溢れるのに呼応して、コニーの内なる春も次第に完成して行くのである。

やがて六月、コニーは夏に姉と海外旅行に出かけ、それから帰ってきた時夫と別れるという決意をメラーズに告げるために雷雨の中を森の小屋へやって来るが、暫しの別れに沈む男を見て誇らかな幸福を味わった彼女は、着物を脱ぎすてて戸外にとび出し、白い裸身を激しい雨に打たせながら踊りくるい、メラーズもやがてこれにならう。そしてその後森の中で摘んだ花々を裸身に飾ってお互いの肉体を讃美するという、いわばこの作品のクライマックスに達するのである。

こうして七月にコニーはみごもり、彼女は夫にすべてを打明け、メラーズは森を出てミッドランドの農場で働くようになる。春に初めて結ばれた二人が、再びめぐってくる春に生れてくる子供を待ちつつ、秋と冬とを「平和な休止」としてしずかに別れ住むところでこの小説は終るのである。

このいわば月並とも云えるプロットをこうしてごく荒っぽく追ってみるだけでも、この一組の男女の結びつきと成

熟が四季の自然の移ろいといかに密接に呼応しているかが分るのである。そしてこのコレスポンデンスがどのような意図のもとになされたかを知るには、ロレンスがこの小説擁護のために書いた『チャタレー夫人の恋人のために』の次の一節を見るだけで充分であろう。

性は男と女のうちにあって絶えず変化しつつ一年のリズム、地球と相関連する太陽のリズムを経過してゆく。人間が一年のリズムから、太陽と大地と自己との結合から切りはなされたとき、おゝそれは人間にとって何という災厄であろうか。愛が単なる個人的感情となり、日の出と日没から切り離され、夏至や冬至、春分や秋分の神秘な関係から断ち切られるとき、おゝ、なんたる破局、そして何たる愛の不具化であろうか。これが現在我々に問題となっていることなのである。我々は根元から出血している。それは大地と太陽と星々から切り離されているからだ。(6)

即ち、森が冬の眠りからさめ、芽ぶき、花咲き、一つの花が移ろってはやがて又新たな花が開くという季節の移りゆきは、単にコニーとメラーズの愛の情趣を引立てるための道具立てなのではなく、この自然の根源的なリズムと男女の性のリズムとを結びつけることこそがロレンスの重要な目的であったことは明かである。

三

ところで、ロレンスの他の小説において、この性と自然の関係はどうなっているだろうか。ロレンスの主要な長篇小説、例えば『息子と恋人』、『虹』、『恋する女たち』等をこの点について検討してみると、一つの興味ある符合が見られるのである。即ち、これらの作品においても、満足すべき性関係が初めて持たれるのは森や野原など自然のただ中においてであることだ。

『チャタレー夫人』のコニーとメラーズが、双方ともに充足した性愛に初めて到達したのは森の茂みの中であったことは前にふれておいたが、『虹』のアーシュラとスクレベンスキーにとっては、それは峡間の新緑のかしの木の下であったし、『恋する女たち』においてアーシュラとバーキンが初めて完全な結合を経験したのも、シャーウッドの森の羊歯の繁みの中であった。『息子と恋人』のポールとクララにとってそれはたげりのけたたましく鳴く野原であった。この野原の一夜をロレンスは次のように描いている。

彼女は何なのだろうか。彼女は或る強い不思議な野生の生命で、その間中暗闇のなかで彼の生命と共に呼吸していた。凡てそういうことは彼等二人よりも余りに大きい事柄だったので彼は声が出なかった。二人は出会い、それによって様々な草の茎が体を突つくのや、たげりの鳴き声や、星の運行と一つになったのだった。(7)

この一節を読むだけで、自然の中の性というパターンが意味するものは自から明かであろう。そしてこの初期の代表作と最後の長篇『チャタレー夫人の恋人』をこの点に関して此較してみる時、ロレンスにとっての性の理想像、即ち一人の男と一人の女の結びつきが大自然のいのちとの交歓でもあるという理念は、彼の作家的生涯を通じても結局大して変化していないことに気づくのである。

ただ、こういった理想的性関係は、今あげたような小説の中の男女にあっても容易に永続はしないのである。云うまでもなくロレンス自身その理想の到達しがたいのを熟知していたからに他ならない。

例えば本論の冒頭にものべたように、『恋する女たち』の主人公バーキンは、最初、性を「ぞっとするほどいやらしい」ものとして憎悪していた。彼が何よりも愛したのは、女ではなく、自然、特に植物だったのである。以下、ロレンスの小説中でも自然への官能的な愛を典型的に示す一例として引用してみよう。

彼は衣服を脱ぎすてて、裸のまゝ桜草の上に腰を下し、腕や腿やひざをわきにつけて足を花の間でそっと動かしてみた。それからうつぶせになり、草を腹や胸に触れさせた。全身にふれる冷たく快い微妙な感覚、彼はそれによって生気を吹きこまれるような気がした。……それから又、股にちくちくする暗色の樅の小枝を突きさしたり、肩に榛の木の軽いむちを感じたり、銀色の樺の幹を胸に抱きしめてその肌のなめらかさや硬さをあるいはこぶや節の息づきをじかに感ずる――それはすべてとてもいいことだ、人の心をみたしてくれる。……いまバーキンは女を求めない――いささかも求めない。[8]

こうした自然への愛、花鳥の美を鑑賞するといったような静的で傍観的な態度ではなく、もっと官能的な陶酔とでもいうべき自然愛はロレンスの作品のいたる所に見出される著しい特徴である。男女の性行為を描写した場面は、『チャタレー夫人』を除いた他の作品においては、ロレンスにはられたレッテルからすると意外な程にあっさりしたもので、官能的な味わいはそれほど濃厚ではない。しかるに一方、自然描写はむしろ人間同志の性描写以上にセクシュアルなものが多いことは興味深い事実であろう。今引用したバーキンに関する箇所もそうであるが、もう一つ、短篇『太陽』から、主人公ジュリエットが転地先で太陽と親しむうちに身心共に甦えつてゆくくだりを引いてみたい。

彼女は着物をすっかり脱いで日光の中に裸かで横たわった。そして横になったままで指の間から中央の太陽を見上げた。……驚くべき青さで波動し、生きいきとし、その外縁から白熱光を流出する太陽！彼は青い火の形相を以て彼女を見下し、そして彼女の乳房と顔、彼女の喉、その疲れた腹、そのひざと股と足とを包んだ。……彼女は太陽が骨の中まで、いやそれどころか彼女の感情と思想の中まで浸透してくるのを感じた。[9]

オルダス・ハックスレーによれば、[10]樹木やひな菊や砕ける波になりきり、獣の皮膚のうちに入りこんでその感ずるところを感ずることができたというロレンスにとっては、こうした自然との神秘的な交歓を示す描写も、単に詩美を盛り上げるための比喩的表現ではなかったに相違ない。又こうした自然描写をフロイド風に人間の性行為そのものの

シンボルであるととることも同様に誤りであるように思われる。ロレンスにとって、自然は性のシンボルなのではなく、いわば性が自然のシンボルだったのである。

更に、今続いてあげた二つの引用には大きな共通点があることに注意したい。即ち、草花や樹木と戯れているバーキンにとっては女は必要でなかったし、太陽と交るジュリエットも「太陽を知り、太陽の方もこの言葉の宇宙的、肉体的な意味において彼女を知ったという確信を持つと同時に、人々から切り離されているという感じと、人類全体に対する或る軽蔑を感じた」のである。自然との熱烈な交わりが必ずしも人間と人間を結びつける助けとはなっていないという例がここにあるわけだ。『息子と恋人』や『虹』においてもそうした情況が表されているし、それどころか一組の男女の間において、一方の自然への耽溺が他方を焦立たせ、二人の気持を引き離すという情況—例えば『恋する女たち』のガドランとジェラルドの場合[11]—もいくつかみとめられるのである。

前にも述べたように、自然と神秘な交流を持つことのできたロレンスにとっても、自分の妻をも含めて他の人間をいかにして愛し得るかという問題は、生涯を通じて苦渋に満ちた模索を続けねばならぬ大きな課題だったのである。しかも、不幸にして人間は、いかに自然が豊かで永遠であろうとも、自然との交りのみで満足することはできないのだ。先にあげた『恋する女たち』からの引用にあったように、人間などは要らない、愛する植物たちと一諸にいれば幸福だといっている当のバーキンが「同時に魂の底に或る種の悲しみを感じた」とのべていることは象徴的であろう。もっとも、すぐその後で「それは人間をして人間性に固執せしめんとする古い倫理の残滓にすぎないもの」という但し書きがついてはいるのだが。

しかし人間が人間である限り、誰が人間性を完全に脱却し得ようか。その困難さをロレンス自身知っておればこそ、

自然との神秘的結合を人間と人間との交りに重ねあわせることを夢みたのだといえよう。小説『チャタレー夫人の恋人』は彼のその夢から生れた。そして自然の持つ神秘的ないのち、蘇生力を人間と人間のあいだに呼びこむための一つの突破口として、性があらためて強調されることになったのである。

グレアム・ハフによって自意識過剰のヌーディズムだと批判された場面[12]、即ち裸で雨中に戯れるコニーとメラーズの乱舞にしても、いわばこの自然の力を召喚する為の一つの儀式に他ならない。それは力みすぎて、ワイセツというよりは滑稽に近いほどなのだが、その滑稽なほどの強引さの中に、ロレンスのほとんど絶望的な人間回復へのあがきを読みとることができるのである。

ところで、この自然と性の関係について、私は先にその相互性ということをのべた。即ち、男女が真に結びあうためには自然の生命的リズムとつながらねばならない、と云える一方、逆に自然の神秘にふれるために男女の性的結合を手がかりにしなければならない、とも云える関係のことである。『チャタレー夫人の恋人』の場合、どちらかといえば前者の方に比重がかかっているといえようが、後者の方にも今少しふれておきたい。

そこで注意すべきは、ロレンスにとって、自然への陶酔と云い、自然との交歓という場合にも、「自然対人間」という対立的二元論を、脱しようとして結局脱し得なかったということなのである。彼はワーズワースの自然観に関して、それは例えば桜草を自分の胸におしあてて自分の存在の一部と化し、桜草独自の魂を無に化してしまうが如きものだと非難している[13]。ロレンスによれば桜草であろうと牝牛であろうと、それらは一つ一つ絶対的に別個の存在なのであって、詩人にとってすら、おのれを一個の桜草に釣りあわせることは容易な業ではないというのである。

東洋の神秘主義詩人ならば、人間を自然に埋没させるのでもなく、自然を人間にひきこむのでもなく、「自然と人

間」という二元論そのものを超えることができたかもしれない。しかし自然に対して殆ど宗教的であったロレンスにして尚、それはできなかった。そして結局、彼の言葉を借りれば、「すべての雌なるものに対する真の雄の欲望と、あらゆる雌があらゆる雄に対してもつ望ましさ」即ち広い意味での「性」のうちに「それ以外の方法では釣り合わせることのできぬものを等しく結びつけ関係づける真の手がかりが存する」[14]という結論に達せざるを得ないのである。つまり彼にとって、人間と人間のコミュニケーションの為のみならず、自然そのものとより深く交る為にも性が強調される必要があったのだ。コニーが、メラーズと性的に結ばれることによって森とも真の「関係」を持つことができるようになり、一方、下半身マヒのクリフォードは彼の大切にしている森と結局交ることができないというのはそういう意味なのである。

このように考えてくると、ロレンスにおいて性がいかに厳粛な役割を担わされているかに今更のように驚かざるを得ない。しかし、一体ひよわな人間同士の性にそれだけのことをなし得る力があるのだろうかという素朴な疑問が生ずるのも又当然であろう。それが大自然の生命力と結びつくならば可能であるとロレンスは答えているようだ。しかしそれはもう一つの問題を今日我々の前に提起するように思われる。

『チャタレー夫人の恋人』の結末において、森を出て農場に移り住んだメラーズはコニーにあてた手紙の中で次のように呼びかける。

このように事態が進んで行けば、産業主義的大衆にとって未来には死と破滅のほか何一つ残らないだろう……しかし心配はいらない。今までにも悪い時代はあったが、いかにひどくとも、クロッカスの花を消し去り、女の愛を抹殺することのできた時代はなかったのだから。[15]

この小説とほぼ同時期に書かれた旅行記『エトルリア遺跡』の中にも、「野蛮な力が多くの植物を打ちくだく、が植物はふたたび生きかえるのだ。」という一節がみえるのである。[16] 即ち、二十世紀初頭に生きたロレンスは、産業主義と機械文明による人間と自然の破壊を目撃しつつ、なお自然の（彼にとっては特に植物の）永遠によみがえる力、又よみがえらせる力を信ずることができた、そしてそれ故にこそ性に人間回復の希望を僅かにつなぎとめることができたということなのである。しかし、今日我々の目前で、彼にとってよみがえりと希望のあかしであった植物群は次第に死に果てようとしている。「世界が人間によって汚される」とメラーズやバーキンは叫んだ。しかし事態はその文学的予言をはるかに通りこしてしまったのである。自然そのものが人間の手の中で着実に窒息しつつあるようにみえる現在、ロレンスの「自然に還れ」という絶望的な叫びさえもが既に余りにも楽観的にきこえるという不幸を、我々は負わねばならなくなったのではあるまいか。

注

(1) D. H. Lawrenace, "The Shades of Spring", *The Complete Short Stories, Vol. I* (Heinemann, The Phoenix Edition, 1968), p. 210

(2) F. R. Leavis, *D. H. Lawrence: Novelist* (Chatto & Windus, 1962), p. 70

(3) Graham Hough, *The Dark Sun* (Pelican Books, 1961), p. 178

(4) D. H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover* (Heinemann, Phoenix Edition, 1961), p. 63

(5) H. M. Daleski, *The Forked Flame* (Faber & Faber, 1965), p. 282

(6) D. H. L,. "A Propos of Lady Chatterley's Lover", *Phoenix II* (Heinemann, 1968), p. 504

(7) D. H. L., *Sons and Lovers* (Heinemann, The Phoenix Edition, 1962), p. 353

(8) D. H. L., *Women in Love* (Heinemann, The Phoenix Edition, 1969), p. 100

(9) D. H. L., "Sun", *The Compitete Short Stories, Vol II*, (Heinemann, The Phoenix Edition, 1968), p. 530

(10) Aldous Huxley, "Introduction" to *The Letters of D. H. Lawrence*, (Heinemann, 1932, reprinted in *The Complete Letters of D. H. Lawrence*, ed. H. T. Moore, Heinemann, 1962), p. 1265

(11) D. H. L., *Women in Love*, pp. 436–437

(12) Graham Hough, *op. cit.*, p. 189

(13) D. H. L., "...Love was once a little boy", *Phoenix II* (Heinemann, 1968), p. 447

(14) *Ibid.*, p. 452

(15) D. H. L., *Lady Chatterley's Lover*, p. 362

(16) D. H. L., "Etruscan Places", *Morning in Mexico* & *Etruscan Places* (Heinemann, The Phoenix Edition, 1956), p. 29